

いのちの授業あれこれ

いのちの授業、ここが楽しい難しい

「富山いのちと死の教育研究会」を立ち上げて、5年を迎えようとしています。その間、各地で「いのちの教育」が少しずつ実践されてきています。

しかし、「いのちの教育」の大切さは分かるものの、テーマを重く感じたり何をどのように教材化するかに戸惑ったりして、実践できない先生方も多いようです。

この井戸端会議では、これまで「いのちの教育」を実践してこられた4人の先生方にお集まりいただき、「いのちの授業」の難しさや楽しさなど思いのままに語っていただきました。

出席者

富山市立保内小学校

加藤 敏一 先生

射水市立大島小学校

北川 由美 先生

射水市立小杉小学校

高田 昭彦 先生

射水市立塚原小学校

宮崎 玉喜 先生

【加藤】 中学校で初めて実践してから6年になります。その間、私のノートのタイトルは「ライフ・アンド・デス」から「いのちと死」そして「いのちの教育」へと変わってきています。

最初の頃、中学校で「死」を扱うことについて恐さを感じていました。「死」は体験しようがない点で、大人にもよく分からないからです。だから、授業はいつも生徒と一緒に考えざるを得ませんでした。私は、しっかりと生徒の話を聞くようにしました。

「いのちの教育」は子どもも教師も自分を見つめることになり、誠実に生きることにつながると思います。また、子ども理解の一つだと感じています。子どもたちの知らない一面と出会えたときは、とても嬉しい気持ちになります。

【宮崎】 加藤先生が校長として中伏木小学校に着任され「いのちの教育」を推進されて以来、ずっと「いのち」とは、「いのちの授業」とは、を考え求め続けてきました。その中で大切にしてきたことは、子どもた

ちに自分自身を見つめていくこと、他の友達の体験や意見、考えとつないでいくことでした。

今は、「みつめ」「つなぐ」ことが、自分への自信を強め、いのちを輝かせていくのではないかと考えています。

【高田】 現在6年生を担当していますが、自分自身がよりよく生きるための目標をはっきりさせることがあって初めて、他のいのちのことをかんがえることができるように思います。子どもの様子を見ていると熱中できることをもっている子は、他の人のことも考えることが出来ているようです。

6年生全員で近くの特別養護老人ホームを訪問して、歌を歌ったり会話をしたりして、ふれあいを楽しむ活動を実践しています。回を重ねるうちに、子どもたちの心の中に他人のために何かしてあげたいという心が育ってきたように思います。

また先日、谷川俊太郎の詩『生きる』を学習しました。この授業は、いのちのことやよりよく生きること

など、自分たちの生活を振り返るよい契機になりました。

「いのちの教育」を学習する手だては、案外身近に多くあるように思います。

【北川】特殊学級を担任していたとき、何か自慢できるものを持たせたいと思い、図工の表現活動を通して「やった！」と言う感動を味わうことができるように取り組んだことがあります。

特に「いのち」を意識していない子どもたちが、日々に活動の中でうれしいとか、楽しいとかを感じることで、自分の生きている意味が見いだせるのではないかと思います。

特殊学級の子どもの限らず日常生活の一つ一つが感動であったり喜びであったりする事の積み重ねが、自分が自分を認めていくことにつながるように思います。

【加藤】「いのちの教育」の実践の難しさは、年間計画を立てる段階にあると思われれます。反面、難しさは、ねたさがしや教材づくりが自由にできるおもしろさでもあります。

現在6年生で10時間の「いのちの教育」の単元づくりを考えています。10時間目の内容は決まっているのですが、後の9時間をどう計画するか考えているところです。「いのちの教育」では、日常的に機会を捉えて随時実践していくことと単元計画を立てて授業を展開していくことの2つを考えてく必要があります。

【高田】ちょうど今、総合学習「生きる」に取り組んでいるところです。生きる裏側には死があるわけですが、死はタブー視されているくらいがあります。しかし、高学年頃になると、死について考えるようになり、避けて通れないテーマのように思います。

そこで、毎日のニュースやテレビ番組、雑誌などが

ら見つけた話題を、子どもたちに提示して考えさせるようにしています。また、身近にも話題があり、そこから自分の生き方を見つめさせるようにしています。

とにかく、考える、見つめる場を提供し続けることが大切です。

【北川】私は、小さいときに父をなくしたのですが、その時のことがあまり印象に残っていないのです。それは、そのときの自分の器が小さかったからではないかと思います。だから、いろんな体験を通して、感じる心など器を大きくしていく必要があるように思います。そのためにも、子どもたちの中に楽しいこと、できることを積み上げていかねばなりません。

【宮崎】3年生で金子みすづの詩の学習を通して、見えないものを見つめる実践をしました。

聞こえないもの、見えないけれど「在るもの」に心を寄せることで、いのちを見つめることにもつながったように思います。ただ、うまく表現できない子の心をつかむ難しさを感じました。

「いのちの授業」と取り組みながら、教師自身の心を敏感にしていく必要を感じています。

どうも「いのちの授業」の難しさは、楽しさでもあるようですね。一人では難しそうだけど、子どもたちと一緒に考えたいけそうです。

今日は、どうもありがとうございました。

(この井戸端会議は、平成17年11月12日に行われた座談会を一部抜粋したものです。)(文責:会員 盛光文雄)